

相模原市立博物館活動評価書

(評価期間：平成 23 年度～平成 25 年度)

平成 2 7 年 3 月

相模原市立博物館

【目次】

相模原市立博物館活動評価の総括 (評価期間：平成23年度～平成25年度)	1
博物館の活動評価に到るこれまでの経緯	4
相模原市立博物館活動評価	
事業評価シート(定量評価)	6
事業評価シート(定性評価)	7

相模原市立博物館活動評価の総括 (評価期間：平成23年度～平成25年度)

平成20年6月に「博物館法」が改正され、博物館の運営状況の評価やその情報の提供等を行うこととされた。このため当館では、当館の使命及び重点目標等に基づき、定量評価及び定性評価の手法で、博物館協議会委員による有識者評価を経て、平成23年度から平成25年度までの活動について点検・評価を行った。

【当館の使命】

地域の歴史や文化・自然に関する資料を調査研究し、また、収集した資料を適切に保存し蓄積するとともに、その活用を図りながら地域文化を継承・発信する拠点となること
主体的に参加した市民と協働し、あるいは地域の諸機関と広く連携していく体制を整え、市民文化の向上に資する活動を積極的に展開すること

【重点目標】

- 1 常設展示のリニューアルと博物館ネットワーク計画の推進
- 2 関連施設・機関との連携
- 3 市民との協働による博物館活動の展開
- 4 博物館の基礎的な機能を果たすために必要な活動

平成23年度～平成25年度における活動評価全体総括

市民とともに歩む博物館として、地域に根差した活動を活発に行っている点が有識者会議において評価された。

具体的には、JAXAと連携した宇宙教育普及事業をはじめ、常設展示のリニューアルとして市民目線による展示替えを実現しようとしている点、博物館ネットワーク計画の推進として大学との協働でWebサービスを充実した点、地元NPO法人と協働して多彩な事業を実施した点などである。

特にJAXAや市民団体との連携・協働による事業展開は多角的な広がりを見せており、積極的に展開していく。

一方、博物館イベントなどの広報等は積極的に行っているが、利用する年代層にやや偏りが見られるため、市民への周知方法についてさらなる研究を進める。

このように、今後とも改善を積み重ねながら、さらに地域文化を継承・発信する拠点としての博物館を目指して活動していく。

【定量評価】

定量評価(6ページ)は、事業評価シート(定量評価)のとおり、入館者数をはじめ、どの項目も目標を上回る、あるいはそれに近い数値を達成しており、堅調な動きを見せている。

課題として、定量的評価の数値を定性的評価の観点を踏まえて分析して、数に含まれる意味合いを探っていく点がある。

【定性評価】

定性評価(7ページ以降)は、今回の評価書作成にあたり、直近の平成25年度の活動状況に対する評価を中心に記載しており、各項目については、以下のとおり総括した。

- 1 常設展示のリニューアルと博物館ネットワーク計画の推進(7~10ページ)では、「市民による常設展示の検討」「博物館ネットワーク計画の推進」「情報ネットワークシステム構築」「吉野宿ふじや」の活用」について評価を行った。

有識者意見からは、市民による常設展示の展示替えを目的とした検討会が結成され、市民目線の展示を実現しようとしている点や、博物館ネットワーク計画の推進として、大学との協働事業としてWebサービスを充実した点、「吉野宿ふじや」の活用として地元NPO法人と協働事業を行って多彩な事業を実施した点について高く評価された。

課題として、展示替えに際して市民から提出されるさまざまな意見や要望を適切に反映させることや、博物館ネットワーク計画の認知度をWebサービスとともに紙面による広報や展示などの企画等を通じて一層高めることが挙げられる。

- 2 関連施設・機関との連携(11~14ページ)では、「JAXAとの連携」「学校への学習支援」「公民館等との連携」について評価を行った。

有識者意見からは、国際的にも知名度の高い機関であるJAXAと連携した宇宙教育普及事業が多数実施されている点や、全体として学校の授業等への支援が広く行われており、そのほかにも、地域にあるさまざまな施設や機関と連携している点について高く評価された。

課題として、博物館を利用する年代層には中高生が極端に少ないなどの偏りがあり、さらにこうした施設や機関と今後とも連携を深め、成果をきめ細かく地域に浸透させていくことが必要である。

- 3 市民との協働による博物館活動の展開(15~16ページ)では、「市民の会の活動の展開」「市民学芸員の活動の展開」について評価を行った。

有識者意見からは、博物館に拠点を置く市民の会の多彩で積極的な活動が実施され、活動の軸の一つとなっている点や、特に市民学芸員などが自ら展示内容等を企画しつつ

実行するといった、主体性を重視した活動のあり方が高く評価された。

課題として、会に参加する者が高齢化・固定化して人材の確保が難しくなる面があり、人員の確保のために新陳代謝を進めていくことや、市内にある関連団体を把握してネットワーク化を図り、コーディネートしていく取り組みが必要である。

4 博物館の基礎的な機能を果たすために必要な活動(17～18ページ)では、「市民とともに実施する資料整理及び展示、調査成果の公表」「新たな防災マニュアルの策定」について評価を行った。

有識者意見からは、市民の会を中心に数多くの資料採集や整理を行ったことが高く評価された。

課題として、資料収集や整理に伴う作業の過程と成果を適切にチェックする体制を維持することが求められるが、膨大な資料の整理にはまだまだ人手が不足しているので、その体制の整備が急務である。さらに、新たな防災マニュアルの策定は、津久井地域を含めた広域のマニュアル作成の早急な完成と、そのための訓練が必要である。

博物館の活動評価に到るこれまでの経緯

平成 20 年 6 月 博物館法改正

博物館法条文

(運営の状況に関する評価等)

第九条 博物館は、当該博物館の運営の状況について評価を行うとともに、その結果に基づき博物館の運営の改善を図るため必要な措置を講ずるよう努めなければならない。

(運営の状況に関する情報の提供)

第九条の二 博物館は、当該博物館の事業に関する地域住民その他の関係者の理解を深めるとともに、これらの者との連携及び協力の推進に資するため、当該博物館の運営の状況に関する情報を積極的に提供するよう努めなければならない。

平成 21 年 12 月 第 8 期博物館協議会へ「活動状況に関する評価計画の策定」を諮問

第 8 期博物館協議会（任期：平成 21 年 11 月 20 日～平成 23 年 11 月 19 日）において、博物館評価の先進事例や当館のこれまでの活動状況をもとに、評価のあり方について検討が行われた。

平成 23 年 11 月 第 8 期博物館協議会による答申「活動状況に関する評価計画の策定」

評価のあり方について答申されるとともに、相模原市立博物館の使命として次のとおり定められた。

地域の歴史や文化・自然に関する資料を調査研究し、また、収集した資料を適切に保存し蓄積するとともに、その活用を図りながら地域文化を継承・発信する拠点となること
主体的に参加した市民と協働し、あるいは地域の諸機関と広く連携していく体制を整え、市民文化の向上に資する活動を積極的に展開すること

また、重点課題として次の項目が挙げられた。

常設展示のリニューアルと博物館ネットワーク計画の推進

関連施設・機関との連携

市民との協働による博物館活動の展開

平成 24 年 2 月 第 9 期博物館協議会に諮問「活動状況に関する評価計画の策定」について

第 9 期博物館協議会（任期：平成 23 年 11 月 20 日～平成 25 年 11 月 19 日）において評価計画及び具体的な評価の手法について検討を行った。

平成 25 年 11 月 第 9 期博物館協議会答申「博物館の活動状況に関する評価について」

同答申において、具体的な実施方法について次のとおり策定された。

定性的評価と定量的評価を組み合わせで行う。

定量的評価は、博物館における一般的な数値である入館者数ばかりでなく、特に当館の重点課題の一つである市民協働に資する活動等に係わる数値について、目標値を設定した上で実施する。

定性的評価は博物館の使命を達成するための当面の重点課題に対して行う。

実施の手順に際しては、重点課題を達成するために実施する事業について、まず館内部での企画内容とそれへの達成度に対しての自己評価を行い、それに対しての利用者・参加者側の評価をアンケート等の結果を基に示し、その上で**博物館協議会による有識者評価**を行って、全体的な評価としてまとめる。なお、協議会による評価は、会議の開催日程等、時間的な制約もあるため、効率的な実施に務める。

定性的評価に際しては、実際に評価を行う際の評価シートの原案を作成しており、それに基づき作業を行う。

実施した評価は、次年度の館のホームページ等においてすみやかに公表するとともに、その後の事業展開や運営に反映させ、その結果も必要に応じて公表する。

「博物館の基礎的な機能を果たすために必要な活動」を重点目標に加える。

平成 25 年 11 月 第 10 期博物館協議会による有識者評価開始

第 10 期博物館協議会（任期：平成 25 年 11 月 20 日～平成 27 年 11 月 19 日）において、新・相模原市総合計画前期実施計画期間である平成 23 年度から平成 25 年度までの博物館の活動評価について、**有識者評価を実施した**。同時に、利用者統計や来館者アンケート、ボランティアによる評価等など、評価の全体像について検討を行った。

平成 26 年 11 月 相模原市立博物館 平成 23 年度から平成 25 年度までの活動評価を作成

平成 27 年 3 月 相模原市教育委員会定例会議にて報告

次回の評価は新・相模原市総合計画中期実施計画期間終了後に実施する。

相模原市立博物館活動評価

事業評価シート(定量評価)

	項目	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度	25年度 【前年比】	25年度 (目標)
	入館者数	128,124	136,000	182,880	137,608	138,619	138,660 【100.03%】	140,000
	プラネタリウム観覧者数	52,294	50,540	78,991	61,648	55,377	55,905 【100.95%】	56,000
	講座・講演会参加者数	12,811	11,527	8,110	10,721	9,100	10,114 【111.14%】	9,500
	講座・講演会数(延べ回数)	24(131)	18(111)	20(114)	24(109)	37(105)	36(124)	40(110)
	職員派遣(外部講師)数	76	45	49	56	54	58 【107.4%】	55
	市民の会数(登録者数)	7(139)	7(154)	8(197)	9(181)	10(228)	12(228)	10(250)
	市民の会延べ参加者数	1,876	1,766	1,699	2,305	2,147	2,559 【119.18%】	2,200
参考	ホームページアクセス数						110,391	110,000

20～24年度単年度数値無し

全体を通して

最新の平成25年度数値を見ると、どの項目も目標を上回る、あるいはそれに近い数値を達成しており、恵まれた環境を生かした活発な活動が行われている。今後は、定性的評価に属する評価を定量的評価で裏打ちして分析の手助けとし、さらには、定量的評価を定性的評価の観点で踏まえて分析して、数に含まれる意味合いを紐解いていく作業が必要になってくる。評価項目に関するアンケート内容の再構成など、博物館の使命を全うするための必要な情報は何か、集まったデータをどのように活用していったらよいか等について検討していく。

、 に関して

入館者数・プラネタリウム観覧者とも、小惑星探査機はやぶさの再突入カプセルの世界初公開(7月)及び全天周映画「HAYABUSA」の人气が大幅に盛り上がった平成22年度に対して、それ以後の三年間は入館者は13万人、プラネタリウムは5～6万人台を記録し、堅調な動きを見せている。

～ に関して

講座・講演会の参加者は、22年度に大幅に減ったが23年度からは回復している。講座・講演会の回数も特に24年度からは多く増加し、さらに25年度は連続する講座等が比較的多く実施され、延べ回数が増加している。また、職員派遣数も23～25年度にかけては一定の数値を示している。

、 に関して

市民の会は、年度が進むにつれて次第に増加しており、特に25年度には市との協働事業提案制度で採択された2団体が増え、全部で12団体となった。市との協働事業提案制度による団体は、大学など構成人数を算定するのが難しく、登録者に含んでいない。従って、事業に従事した人数は表に挙げたものより当然多くなる。市民の会への延べ参加人数は、活発な活動を背景にそれ以前比べて大きく増加している。

参考値に関して

ホームページアクセス数は、24年度までの数値は累計のみで年度ごとの比較ができず25年度のみとなるが、一日平均のアクセス数は約300であり、ほぼ目標数値通りの結果となった。ただ、現在、ホームページの切り替えを行っており、新旧のアドレスへのアクセスができる等があるため、25年度は参考の数値に留める。

事業評価シート（定性評価）

平成 25 年度の活動状況に対する評価を中心に記載

1 常設展示のリニューアルと博物館ネットワーク計画の推進

1-1 市民による常設展示の検討

自己評価

（事業の概要と結果）

- 全体で 33 名の登録者の市民学芸員のうち 26 名の参加のもとに、平成 27 年秋を目途に特に 3 テーマ「くらしの姿」を中心とした自然歴史展示室の一部の展示替えを目的として検討会を開始出来た。検討会では、従来までの展示内容と、そのような展示となった経過を説明して、現状の展示についての理解を深め、また、これまでに行っていた市民学芸員の常設展示の内容についての意見等も踏まえつつ、今後の展示替えの方向性を検討していく。

（特記事項）

- 当初の計画よりも開始時期が遅くなったが、今後とも市民学芸員がただ意見を言うのではなく、具体的な展示替えの内容を踏まえた上で、実際の諸作業にも係わっていただく方向で進めていく。

（利用者意見）

- 主に、改善すべき点として、展示全体の動線と表示の分かりにくさ・より分かり易い解説及び解説を読ませる工夫・人による解説の手法の導入・これまでに作成した説明資料やクイズラリー資料の再活用等の意見が出された。

有識者意見

- 現在の自然・歴史展示は、改善すべき点として挙げられているようにやや分かりにくく、見づらい点があった。展示替えを目的とした検討会が結成されたことは、市民目線の展示を実現し、また、市民が展示作業に係わる点からも他にあまり例がないものとして評価出来る。こうした市民の係わりがどのように反映され、様々な工夫が生み出されていくか、外部業者への委託や学芸員だけで行うのに比べて時間はかかるが期待したい。今後は常設展示全般の見直しに進むことが望ましく、検討の必要がある。
- 展示替えに際しては、系統的・学術的な面からの展示も心がけなければならないが、また、提出される様々な意見や要望に対し、館としてのスタンスを明確にして適切に反映させることが求められる。何ができて何ができないか、改善の必要があるものはなにかなど、各要望に応じていく具体的な手立てについて、利用者のみならず、館・有識者ともに相互の検討が必要である。

1 常設展示のリニューアルと博物館ネットワーク計画の推進

1-2 博物館ネットワーク計画の推進

自己評価

(事業の概要と結果)

- ・ ネットワーク計画推進のため、ネットワークセンター事業等を市民と協働で推進し、新たに情報ネットワークシステムの構築()及び、吉野宿ふじや活性化事業()を行った。また、津久井地域の資料の展示を博物館で行い、尾崎行雄関係収蔵品展(5~6月)と津久井郷土資料室収蔵品展(9~10月)を実施することが出来た。
- ・ 「収蔵品で知る尾崎弔堂の明治・大正・昭和」(観覧者 6,796名) 尾崎行雄の明治末期から最晩年までの歩みを展観した。
- ・ 津久井郷土資料室展(観覧者 7,238名) 津久井郷土資料室の展示は平成23年度から毎年テーマを決めて実施しており、例えば映画チラシやマッチ箱など実に様々な種類の資料を展示し、こうした多種多様な資料が津久井地域に残されていることを広く示した。展示全体を市民ボランティアである水曜会が担っていることも大きな特徴である。また、会期中、水曜会会員による展示説明の機会を4回設け、511名の参加を得た。

(特記事項)

- ・ 「収蔵品で知る尾崎弔堂の明治・大正・昭和」は関係資料の収集の状況が分かる展示として、弔堂を広く市民に知っていただく機会となったが、書簡など、資料の種類の違いが大きく、観覧者にとって分かり易いものとなったかについては、今後検討を進める。

(利用者意見)

- ・ 実に多くのものがあるって興味深く見ごたえがあり、大変懐かしく、何気ないものでもたくさん集めておくとは貴重な資料となることに気づいたなどの意見が多くあった。より多くの資料をたくさん見せるために多くを展示することに重点を置いたためか、もう少し説明が欲しい等の要望があった。施設としては、津久井郷土資料室の認知度が低いことが明らかになった。

有識者意見

- ・ 津久井地域の合併によって館の活動範囲は大きく広がり、業務内容も激増したと思われるが、各地域の施設における展示活動が維持されたことは評価したい。これは学芸員のみならず、市民ボランティアの積極的な参加があって実現出来たものと思われる。今後ともボランティアのさらなる活動を期待し、同時に学芸員の過重な負担増にならないためにも職務分担等の見直しが必要である。
- ・ 津久井地域は多くの自然・文化遺産を有しており、熱心な方も多く、博物館活動の発展に大きな可能性を持つと思われる。また、津久井地域から博物館まで来るのは大変であり、津久井郷土資料室は重要な存在であるが、それだけに同室の認知度が低いことは残念である。相模原地域からの潜在的なニーズも高いと思われるので、一層の広報活動や例えばツアー形式の企画等を検討してはどうか。「吉野宿ふじや」の協働事業の好調さは、その可能性を裏付けている。
- ・ 津久井郷土資料室は、まず場所が分かりにくいので幟などがあるとよい。貴重な雑誌や教科書等、書籍類が自由に閲覧出来る点もよいが、収蔵資料を博物館の特別展示で扱ったり、例えば学習資料展の「昔の暮らし」のような企画で実際に手にとって見られる機会を設けたりすることなども一つの方法と思われる。

1 常設展示のリニューアルと博物館ネットワーク計画の推進

1-3 情報ネットワークシステム構築

自己評価

(事業の概要と結果)

- ・ 情報ネットワークシステムの構築を目指し、神奈川工科大学情報メディア学科の白井研究室との協働事業として「みんなでつくる相模原『知的探求散策アルバム』」事業を行い、市民が自ら自然・歴史・文化等に関する情報を収集し、発信する方法について検討した。その一環として、来館者アンケート・デジタルサイネージの設置・無線LAN整備・「スマ歩さがみはら」の公開・博物館ホームページリニューアル等を実施することが出来た。

(利用者意見)

- ・ 館のWebサービスについて、来館者アンケートを実施したところ、博物館の情報を「知りたい時に利用する」あるいは「見たことがない」という回答が多く、世代別に見ると今後の活動の中で新しい情報発信チャンネルとして、ネットメディアの活用を図りながらいかにして具体的なユーザー層を捉えていくかが課題である。
- ・ 博物館への要望として、体感型展示物やイベントの要望が高く、実際には年間大小を合わせて100件以上のイベント類を開催しているのにも係わらず、その認知度が低いという点が挙げられる。

有識者意見

- ・ 大学の情報系研究室との協働事業は、市民自らが博物館の事業や分野の情報を収集・発信する試みであり、Webサービスの充実として大いに評価したい。そうすることで博物館の事業が広く市民に認知されると同時に、市民からの正当かつ客観的な当館の評価につながることを期待したい。
- ・ ホームページは利用度が高いと予想される中で、協働事業でホームページのリニューアルを実施するなど、発信元としての準備は評価出来るが、一般市民の認知度については疑問も残る。Webサービスに関しては、利用する側の年齢層や利用環境に左右されてしまうことも多いので、情報メディアだけにこだわりすぎないように広範囲の利用者の目線も大切に、広報紙や公民館報等の紙面による広報にも力を入れていくべきである。

1 常設展示のリニューアルと博物館ネットワーク計画の推進

1-4 「吉野宿ふじや」の活用

自己評価

(事業の概要と結果)

- ・ NPO法人ふじの里山くらぶとの協働事業として、甲州道中吉野宿の面影を今に伝えるための展示施設である「吉野宿ふじや」を拠点に地域の特性を生かして、情報発信をする「吉野宿ふじや活性化事業」を実施した。国道の拡張工事に伴う施設の曳き家作業の後、7月に再オープンするとともに企画展(2回)や地域を巡る歴史散策、藤野の魅力と可能性を語り合うつどいなどを行い、合わせて延べ1,135名の参加があった。また、「さがみはら発見のこみち」として「甲州道中吉野宿マップ」を3万部制作し、吉野宿ふじや、博物館及び近隣の観光施設等において半数近くを配布するなど、地域の活性化に貢献することが出来た。

(特記事項)

- ・ 総じて吉野宿ふじやを拠点として展示をはじめ多彩な事業を実施することができ、協働事業の一年目として当初の目的は達成されたと考えられる。今後とも例えば展示した写真の情報を収集して活用するなど、事業をさらに充実させ、協働による魅力あるまちづくりや地域振興にいかにつなげていくかの検討を進める。

(利用者意見)

- ・ アンケートによると、展示ではこれまでのものを上回る入館者があった。歴史散策や語り合うつどいでは企画に対して好評な意見が多く、本協働事業への協力や支持が示されたり、市外参加者から活動事例の参考にしたいとの意見もあり、予想外の広がり認められたことが特筆される。

有識者意見

- ・ 地元のNPO法人との協働事業により、企画展や歴史散歩など、多彩な事業が実施出来たことは博物館が、地域の再発見やまちづくりにも貢献出来ることを示唆したものとして評価したい。特に合併により、相模原市が広域化したために甲州道中と関連して人文系分野の対象が広がり、今後の活動も多彩なものとなっていく可能性を感じる。この場合、江戸時代の街道の面影を少しでも残すことが大切で、その時代に戻れる体験の場は感動的である。今後も、この方面の情報を広く市民に伝えていくことが重要である。
- ・ 吉野宿マップは大変見やすく、住民が地域の歴史を知ることは長いスパンで考えてとても重要であり、観光振興につながる可能性もある。特に圏央道の開通により、より近くなった利用者が増えることも予想され、マップを置く場所を増やすなども考えられる。吉野宿ふじや自体は当時を偲ぶ資料は少ないため、写真や模型の展示の箇所を工夫し、古民具もテーマを決めて詳しい解説とともに展示するなど、今後も企画展を計画することが必要である。

2 関連施設・機関との連携

2-1 JAXAとの連携
自己評価
(事業の概要と結果) <ul style="list-style-type: none">・ 「はやぶさ2応援企画」として、夏季企画展「片道から往復へ」(会期7～8月・観覧者33,675名)を実施し、特に「はやぶさ」が持ち帰った小惑星イトカワの微粒子を世界初で特別公開することができた(観覧者7,146名)。・ 「はやぶさ」が帰還した日である6月13日を中心に「はやぶさ週間」とし、13日には全天周映画を無料公開し、392名の観覧者を得た。・ 新たに「さがみはら宇宙の日」を設定し、毎月1回JAXAを中心とした研究者を招いて、宇宙に関する話題や偶数月には火星探査機「あかつきチーム」による講演やワークショップを実施した(参加者893名)。
(特記事項) <ul style="list-style-type: none">・ 微粒子公開では顕微鏡による公開だけでなく、天文担当学芸員が隣りで説明したことで理解が深まり、満足度が高まった。・ プラネタリウム番組の制作に当たり、JAXAの研究者の監修を受けるだけでなく番組にビデオ出演していただくなど、独自性の高い番組作りを行うことが出来た。
(利用者意見) <ul style="list-style-type: none">・ 企画展はJAXAと隣接し、連携を行っているという利点を生かし、数々のJAXA所有の実物資料を展示している点が評価される。特に平成25年度は「イトカワ」の微粒子公開を真っ先に実施したことが素晴らしい。・ 「さがみはら宇宙の日」は近隣住民だけでなく、県内及び都内からの参加者も多く、博物館への注目度をあげることに寄与している。また、「あかつきトークライブ」では「出席カード」を配布しており、リピーターが多いことが明確になっている。ただ、実施アンケートでは中学・高校生の参加が少ない点が課題となっている。
有識者意見 <ul style="list-style-type: none">・ 国際的にも知名度の高い機関との連携といった、目玉を有しているのは重要である。JAXAとの連携した事業が多く展開され、当館の天文分野の活動が広く認知されてきたことは歓迎すべき点であり、今後も関連施設に恵まれた立地条件を有効に生かした事業の継続を期待したい。・ 小惑星イトカワの微粒子公開は世界初ということもあり、観覧者の評価も高かった。また、毎年実施している夏季企画展もJAXAとの連携が大きな力となっている。プラネタリウムや星空観望会といった一連の企画も博物館の人気を高め、観望会も雨天でも中止にならず、プラネタリウムでの分かり易い解説やクイズなども、子どもたちから喜ばれている。ただ、展示や講演会では難しい内容もあり、専門用語や数字など、一般の者でも分かるような工夫が望まれる。・ 中高校生の参加が少なかったのはPR不足も考えられ、各学校で資料やパンフレット類をどのように扱うかも問題である。

2 関連施設・機関との連携

2-2 学校への学習支援

自己評価

(事業の概要と結果)

- ・ 小中学校・幼稚園・保育園等へのプラネタリウム番組の学習投影では 12,847 名の観覧者があった。必ず事前に指導主事や学習指導員が利用団体と打ち合わせを行い、単なる娯楽的な上映にならないように留意している。また、学校及びそれに類する団体への展示学習や中学生の職業体験等も積極的に取り組み、3,095 名を受け入れる成果を得た。
- ・ 博物館と学校の連携のあり方を検討する「学校と博物館の連携を進める研究会」(委員・小中学校教員 8 名)では、「貸し出しキット」(実物を貸し出して授業で活用するもの)の活用や利用促進に向けての活動を行い、利用数が大幅に拡大した(平成 24 年度 17 件・25 年度 46 件)。
- ・ 11 月～2 月には小学校 3～4 年生の社会科学習の単元に併せた館所蔵品を中心とした「学習資料展」を実施し、昔の道具や暮らしを紹介した(観覧者 20,110 名)。また、この展示全体を企画し、列品作業等も担当した市民学芸員による昔の遊び体験(チャレンジ体験コーナー)も行い、1,801 名の参加を得た。
- ・ 11 月に実施した「学びの収穫祭」では、中学校一校・高校三校・大学三校が各種発表を行い、日常の調査や研究の成果を広く一般市民に知らせる機会を設けた。

(特記事項)

- ・ 学習資料展は小学校中学年の学習内容に沿ったものとして、主に小学生を対象に昔の道具や生活について、関心を持たせることを目的としており、その目的はほぼ達成された。市民学芸員が中心となって実施するスタイルも定着しつつあり、企画から実施までスムーズに行うことが出来た。体験型の展示を多くしたこともあり、この点も好評であったが、人的な問題もあり、特に平日に体験が出来る展示の検討を進める。
- ・ 学びの収穫祭では、特に中学・高校の自然科学系の部活動が低迷する中で、外部の発表の場を設けることは活性化に向けての不可欠な要素であり、異なる世代間の学習交流という点でも意義があるものである。

(利用者意見)

- ・ 学習資料展では、通常のアンケートとは異なり、毎回「思い出掲示板」として展示を見た感想を自由に記載していただき、それを会場に掲示して別の観覧者に自由に見てもらう方式を採用している(回収 306 通)。それによると、子どもたちからは、昔の道具の使い方や生活がよく分かった、昔のことが学べて勉強になったとの記載がほとんどで、大人たちからは昔の道具や生活を思い出し、懐かしむ声が多く寄せられ、毎年この展示を楽しみにしているとの意見もあった。

有識者意見

- ・ 学校への学習支援は盛りだくさんで、例えば、「学校と博物館の連携を進める研究会」が作成した一連の博物館ガイドや貸出しキット、プラネタリウム、学習資料展、学びの収穫祭など、全体として学校との連携が広く行われており、低学年から高学年に渡って学校教育に貢献出来るものとして、その成果について今後も大いに期待したい。その上で、学校や地域の利用の差を比較したり、総合的な学習の時間に博物館を利用することへの働きかけ、中学生への職業体験や平和教育等の企画、理科離れの現状に対しての自然科学系の学習支援への充実など、一層の展開が望まれる。
- ・ 中学生・高校生の参加に関しては、企画展に中高の研究成果を入れる、「学びの収穫祭」に参加するサークルを巻き込んで来館者に対するガイドやワークショップを実施したり、小学校の協力を得て小中学生から継続して博物館活動に親しんでもらい高校生に到る方法などもある。また、市内の高校は地域連携を特色の一つにしているところも珍しくなく、そうした学校への働きかけも必要である。高校生へのバックヤード見学、研究プログラム、インターンシップ及び新採教員への研修など、多様な内容が考えられる。特に近隣の高校の特徴を踏まえながら連携を深めることは様々な可能性が期待される。
- ・ こうした学校教育における学習支援は個別企画として十分に理解されるが、館の対外的な広報戦略の面から考えると、学校関係者以外にも広く周知出来るような分かりやすい「学習支援プログラム」として体系的な全体像を提示してもよいのではないか。

2 関連施設・機関との連携

2-3 公民館等との連携

自己評価

(事業の概要と結果)

- ・ 公民館や環境情報センターなどの各種機関・施設、地域の歴史・自然系の研究会等で実施された講座・観察会などについて、依頼に応じて講師として 58 件（一件に 2 名の派遣例あり）の派遣を行った。その内容の内訳は、生物 19 件・地質 5 件・歴史 19 件・民俗 7 件・天文 9 件、依頼別内訳は、学校関係 24 件・各種機関施設 19 件・公民館 11 件・博物館図書館 4 件である。また、相手先からの依頼があった場合、内容等を確認した上で、より適切な講師が想定される場合には、そうした講師を紹介するなど、全般的な相談に応じている。
- ・ 初めての取組として、民俗関係の市民の会である「福の会」が博物館の収蔵品展で展示した内容の一部を、展示資料の地元である麻溝公民館の文化展で展示して、より密着した地域の人々に広く見ていただく活動を行い、館外へ成果を示すことも出来た。
- ・ 学びの収穫祭では、公民館を拠点として地域の歴史や文化を明らかにする活動をしている三つの団体に呼びかけて、日常の調査研究成果を発表していただく機会を設けた。

(特記事項)

- ・ 講師派遣先のアンケートを見ると、内容的には概ね好評であり、再度話しを聞きたいとの要望も多く寄せられているが、人員体制や他の業務との兼ね合いもあり、件数としては毎年横ばいで同程度に留まっている。今後とも、依頼に応じて講師の派遣を行うとともに、学びの収穫祭での発表の機会のようにそれぞれの施設・機関の支援ばかりでなく、それらをつなぐ仕組みの構築について検討を進める。

(利用者意見)

- ・ 住んでいる地域でも、普段通り過ぎている道端に意外な自然が残っていたり、地域の特色となるような地形があることに気付いたり、散歩の途中に見つけた花の名前を知ったりするだけでとても豊かな気持ちになれた、との意見が寄せられた。

有識者意見

- ・ 地域博物館として人的、物的な知的財産を地域に還元することは重要であり、学芸員の各施設における講師としての社会的活躍を評価したい。特に資料を地元の公民館の文化展で公開するなどの活動は意欲的で、このような出前展示もこれからは必要である。ただ待つだけでなく、人も物も積極的に外に出向いてその存在を外部にきめ細かく浸透させていくことは、今後のあり方の一つとして検討していただきたい。また、こうした外部での講師等は事前準備など目に見えない時間がかかっていることが推測され、将来的には市民学芸員を派遣するようなことも一つの目標に入れてもよいのではないか。
- ・ 公民館は博物館や図書館と同様に社会教育を担う一翼であるが、公民館の職員が博物館をどの程度認識しているかが問題であり、公民館の活動推進員に対する博物館についての研修の機会を設けたらどうか。また、公民館事業には他地域の公民館同士の交流というツールがあり、これによりそれぞれの地域特有のテーマや活動などに触れることが出来る。こうした公民館の連携に乗じて、他地域の博物館施設の見学交流もあってよいのではないか。

3 市民との協働による博物館活動の展開

3-1 市民の会の活動の展開

自己評価

(事業の概要と結果)

- ・ 従来からある 10 団体の市民の会では、資料の調査や収集・整理保管、教育普及、展示など多方面に活動が展開され、登録者数は 228 名、年間の延べ参加者数は 2559 名に及んでいる。各分野での様々な活動はこうした市民の会との協働で実施していくことが定着しており、今や館の活動の軸の一つになっている。さらに、平成 25 年度からは神奈川工科大学白井研究室や NPO 法人里山くらぶとの協働事業も開始され、新たな局面に展開しつつある。
- ・ 市民の会はそれぞれ活動日を決めるなどして定期的に活動しているが、館全体として情報交換や研修の機会とするとともに、館の運営等について意見を聴取する場として「ボランティア連絡調整会議」を 2 ヶ月に 1 回開催している。
- ・ 11 月の「学びの収穫祭」では、それぞれの団体が活動の成果を発表し、2 日間で 252 名の参加があり、一般来館者にも博物館を舞台とする活動を示す機会となった。なお、発表に用いたポスターなどは、収穫祭終了後も 2 ヶ月程度館内に掲示して、さらに広く一般に活動を知らせる機会となっている。

(特記事項)

- ・ 活動そのものは活発に行われているものの、次第に会員の固定化や高齢化が進みつつあり、今後、活動を継続出来なくなる恐れがあるため、新規会員獲得に向けた働きかけを進めていく。

(利用者意見)

- ・ 未整理の資料を整理しつつ、その成果を市民に公開する展示活動に関与することは大切な社会貢献の一環であり、やりがいや満足感に通じる。今後の作業についても、未だに眠っている資料を掘り起こし、多くの人に伝えることを継続していくことが求められる。一方で作業が長期間に及んでいることもあり、その負担感や人員を確保できるかといった課題もある。

有識者意見

- ・ 市民の会の活動は多様であり、当館の活動の軸の一つとなっていることは評価出来る。登録者数も増加傾向にあり、喜ばしい。会の活動が参加者のやりがいや満足感を得て、より自主的に活動がなされることは、市民協働の面からも力強い。市内には博物館活動の趣旨に沿うような団体もあり、そうした団体の把握とネットワーク化を図るとともに、コーディネートをしていくことが大切である。それらの団体への働きかけで博物館への認識を高め、手伝いをしてもらうのも一つの方法である。
- ・ こういった活動の参加が多くなると、担当者の統括にかかる労力は少なくないと推測され、会員の満足度の追及だけでなく、必要に応じて軽減を図るような仕組みも求められる。会自体が抱える会員の高齢化や固定化、人員の確保等の件についても新陳代謝を進めるなど、何らかの取り組みが必要である。その意味では、例えば「学びの収穫祭」では学校の発表も組み込まれており、世代間交流が図られていることは評価することができ、こうした交流の中から今後を模索し、継続発展に努めていくことが求められる。活動の場が広がれば若い世代の来館者数も上がることも考えられる。

3 市民との協働による博物館活動の展開

3-2 市民学芸員の活動の展開

自己評価

(事業の概要と結果)

- ・ 館の教育普及活動全般に係わる市民学芸員は平成 25 年度に新しい会員を公募した結果、全体で 33 名の登録者となった。活動回数は 81 回、活動人員は 692 名を数え 8 月の夏休み期間中に行う常設展示室内のクイズラリーでは企画・設問設定・当日の運営を担当したことで、2 日間で 727 名の参加者を得ることが出来た。また、11 月～2 月の「学習資料展」でも、子どもの学習内容に応じたテーマの検討、展示資料選定、展示の設営・撤収、期間中の休日に行うチャレンジ体験コーナーなど、展示や事業の全般にわたり主体的に活動した。さらに、1 月実施の「繭うさぎづくり」においても、参加者に繭うさぎの作り方の指導を行った結果、180 名の参加者を得た。

(特記事項)

- ・ 特に市民学芸員の活動は、単に館の業務のサポートとしての役割だけではなく、自ら企画し、様々なアイデアを出し合って実行するなど、主体性を重視して実施している。現在では市民学芸員として写真展の開催など、新たな活動を開始することも計画している。

(利用者意見)

- ・ ここ数年の活動で、クイズラリー、学習資料展など、年間の活動の軸が固まってきた。また、そこから派生的に紙芝居の制作など、活動の広がりが出てきている。今後はより自主性の高い独自事業を作り上げていくことが課題である。また、事業の企画や実施だけでなく、自らのスキルアップに繋がる研修などの実施について要望があり、平成 25 年度末から定例会の際に行っている。

有識者意見

- ・ 現在の市民学芸員の活動は大変評価でき、自ら企画し、実行するといった主体性を重んじる考え方は市民学芸員としての意識の高さを感じる。また、明るく活動している姿が印象的で、市民学芸員としての役割を果たしていると思われる。クイズラリーの設問はよく考えられたもので、学びながら博物館を知る良い機会であり、常設展示の理解に大きな役割を果たしている館の大きな特色となりつつある。今後も継続していくことを希望する。
- ・ 市民学芸員の活動は素晴らしいものではあるが、一般市民にその存在があまり知られていない。市民の中には豊富な人材があり、例えばそうした対象への学習会を企画するなど、もう少し気楽に市民学芸員になってもらえるような方法を検討する必要がある。さらに、地域目線を持つ市民学芸員の役割として活動世代を拡大し、若年層の関心と参加を高める意味で、一部に高校生学芸員を置くなどして活動の幅を持たせ、あるいはインターンシップを生かしてみるなどの方策も考えられる。

4 博物館の基礎的な機能を果たすための必要な活動

4-1 市民とともに実施する資料整理及び展示、調査成果の公表

自己評価

(事業の概要と結果)

- ・ 館全体としては、年間で 2,279 件の資料を収集した。
- ・ 各分野で組織されている市民の会とともに、目的に応じて積極的に資料を収集し、併せて収集・保管資料の整理作業を行った。特に、県立生命の星地球博物館が事務局を務める神奈川県植物相調査に「相模原植物調査会」が参加して資料収集及び標本作製を実施し、概ね 2,000 点の資料を収集する成果を得た。
- ・ 津久井郷土資料室保管資料の整理・目録化を行っている「水曜会」では、現在、1 万件以上の資料について整理・目録化を実施した。また、民俗・生活資料の整理をする「福の会」では、主に南区下溝の福田家の蔵の中に保管されていた資料の整理を行い、500 件以上の民俗・生活資料及び着物等の衣類についての整理を完了した。そして、その成果をもとに、5～6月に福の会、9～10月に水曜会が行う収蔵品展を実施することが出来た。
- ・ 市民の会やその他、外部の研究者とともに市内外をフィールドとする調査を実施し、12本の論考を毎年刊行している館の『研究報告』に掲載している。

有識者意見

- ・ 市民の会を中心に数多くの資料収集や整理を行ったことを評価したい。「相模原植物調査会」や「水曜会」「福の会」などの活動は大きな成果を生み、その存在と尽力がなければスムーズに進まなかったと考えられる。作業の成果を公開する場があることはやりがいにも通じるため、今後の活動にも引き続き期待したい。作業量が膨大であるため、作業の過程と成果を適切にチェックする体制を維持することが求められる。
- ・ 市民の手による発表の場作りは意義深いものがあり、その成果を見る人も親しみを増すと思われる。この方面のPRとその後の指導も大切であり、結果報告も分かりやすいものとして、一般市民の目に触れられるようにするとよい。さらに膨大な資料の整理には、まだまだ人手が不足している面も見られるので、こうした市民の会を中心としたボランティアの情報をより広く市民に提供し、呼びかける方法を検討する必要がある。

4 博物館の基礎的な機能を果たすための必要な活動

4-2 新たな防災マニュアルの策定

自己評価

(事業の概要と結果)

- ・ 教育局全体として従来の「防災マニュアル」を見直して各施設の統一を図り、より実情にあったマニュアルが作成されたため、それに対応した博物館の防災マニュアルを検討した。結果として25年度は大幅な変更点はなかったが、防災マニュアルは毎年見直すことになっており、今後は津久井地域の施設を含めた全体的なマニュアルの作成に着手する。
- ・ 館内の訓練としては、10月24日に火災を想定した初期消火・避難訓練、1月26日には文化財デーに伴う訓練を消防署も参加する中で行い、文化財の搬出や心肺蘇生法(AED使用法の会得)の訓練も実施し、実際の災害時の状況に対応するよう努めている。

有識者意見

- ・ 博物館独自の防災マニュアルの検討は、常時様々な年齢層の来館者がいる施設として重要である。津久井地域を含めた広域のマニュアル作成の早急な完成を期待する。最悪の状況を想定して、資料の保存が1ヶ所に集中したために消滅あるいは破損しないように、少なくともデジタルデータなどの2次資料については、館外にも保存してデータの復元が出来るなどの方策も検討対象としていただきたい。
- ・ 特に津久井地域の施設は木造がほとんどであり、防災対策は大切である。現在のマニュアルだけに拘らずに、収集・展示資料をいかに護るかの考えを基にして計画が策定されることを望む。また、それに応じた訓練も必要である。